

スマートモブスとは何か そしてそのとらえ方

公文俊平 (GLOCOM所長) ●インタビュー／石橋啓一郎(GLOCOM研究員)

■スマートモブスとは

石橋 公文所長、会津泉主幹研究員をはじめとするGLOCOMのチームが『スマートモブズ』(ハワード・ラインゴールド著)を翻訳し、8月25日に出版されました。本日は、そのスマートモブズについて、基本的なことからご説明いただけますでしょうか。

公文 まず、「スマートモブズ」というのは、ラインゴールドが書いた本の表題です。そして、この言葉を表題にしてはと示唆したのは、『ワイヤード』誌の編集長だったケビン・ケリーだそうで、彼は数年前に "Out of Control" (邦訳、『複雑系を超えて』アスキー出版局、1999年)という本を書いています。複雑系について調べて、中央で計画的にコントロールできないような種類の人間活動が生まれてきているという事例を徹底的に集めたものです。『スマートモブズ』はその線上にあります。スマートモブズ(smart mobs)という単語は複数形で、単数はスマートモブ(smart mob)です。モブというのは群集、「たくさんの人間の集まり」という意味の集合名詞ですから、モブズとは、そういう集まりがあっちにもこっちにもあるということです。ただ、この連中は単なるモブではなくて、「スマート」という形容詞が付いている。スマートというのはどういうことかという、コンピュータやネットワークがモバイルになり、パーベイシブ(pervasive)——ユビキタスとも言いますが——になる。移動しながら各種のデバイスを持ち運べるようになり、さらにウェアラブルになり、最後には体内に組み込まれるかもしれない。そのようになっていくコンピュータや通信手段を使いこなせるという意味で、スマートです。しかし、モブですから、個人として行動するよりも集まって、英語でいえば "swarm" ——「群が

り」と訳しましたが——を作って、さまざまな集合行動を行う。そういう存在がスマートモブです。

ではそのスマートモブは、われわれのいう「智民」、情報社会における人々の基本的なあり方である智民との関係でいうとどういうことになるのか。これについては、ラインゴールド自身はとくに触れていないのですが、私の理解だと第一次情報革命の出現局面、つまり1950年ごろからおそらく2020年代まで続く出現局面の中で智民がまず出現してくるわけですが、その過程で智民の三つの進化形態が生まれる。その最初がテクノクラートで、次にギークが台頭し、そして三番目にスマートモブズという形をとっていくのではないかと。これが私の予想です。

石橋 なるほど。つまり、スマートモブという言葉は、個人がスマートだというわけではなくて、集団がスマートだということになるわけですね。

公文 そうです。個人としてはどうかというと、二通りの見方があります。一つの見方からすると、モブといわれるように、これまでの近代社会が理念としていたwell-informedな市民に比べると、教育水準も知的水準もたいしたことはなく、趣味も低いという見方が成り立つ。しかし、それでは機関銃のような速度でケータイに入力し使いこなせるのはなぜだろう、という疑問がわきます。つまり一面では、それ以前の市民にくらべて劣っているかもしれないけれど、他面では個人としてもよりスマートになったところが確かにあって——別にすごいプログラムを組んだりするわけではないにしても——コンピュータやケータイをそれなりに使いこなすことができる。しかし集団としては、また別のスマート性を発揮する。これは別途、議論が必要です。

石橋　　ということは、スマートモブズ論では、個人が通信デバイスを使いこなすということも無論あるでしょうが、むしろ集団が、そういう通信デバイスによってエンパワーされるということに注目しているわけですね。

公文　　その結果が、これまで想像もつかなかったような、集団としてのある種レベルの高い行動がとれるようになる。個人個人としては、たとえばカーナビを見てここが空いているからこっちに行こうというように、自分の身のまわりだけを見て動いているのだけれど、そういうドライバーが何千、何万と集まると、ある種の整然とした秩序が生まれてくる。そういう意味でのスマートモブズの出現という、そちらのほうがより大きな社会的意味をもっています。いわゆる「創発秩序」といわれるものですが、それについての議論はまだ一般に不十分です。

■ 新しいリテラシー

公文　　個人の「スマートさ」との関係で言えば、「リテラシー」の意味が変わってきています。『スマートモブズ』にも名前がでてくる、MITメディア・ラボのニール・ガーシェンフェルト教授は、そこのピッツ・アンド・アトムズ・センターのセンター長ですが、このセンターは、要するに、コンピュータがコンピュータとしてバーチャルな世界にあるだけでなく、実際に物理的な世界とかわりをもつ場合の情報とモノを結びつけるインタフェースを研究するところです。最近あるニューズレターで知ったのですが、そこにガーシェンフェルトは、「ほとんどあらゆるモノの作り方」に関するコースを開いた。このセンターには、MITが財布をはたいて買った1台何億円もする高度な工作機械が並んでいて、彼のコースを受ける学生はそれらの機械を自由に使うことができる。で、ガーシェンフェルトが期待したのは、エンジニアリング専攻の超一流の学生が集まってきて、最高級の機械を使っているいろいろなモノを作ろうとするだろうということでした。しかし、10人ぐらいの収容力しかないラボ

で開かれるこのコースに応募してきた百何十人かの学生の多くは、何も技術を知らない。たとえば彫刻や音楽が好きといった連中が、何かおもしろいものを作りたいからどうしても入れて欲しいと懇願したそうです。それにびっくりしたガーシェンフェルトがあらためて考えなおしてみると、自分の見方は少し間違っていた。つまり、いまや新しいルネッサンスが起こっているのだと気がついた。昔のルネッサンスで起きたのは、「リベラルアーツ」と呼ばれた学問分野が生まれて、人々が「リテラシー」を身に着けたということでした。つまり、論理学や算術、幾何学、天文学、音楽といった、教会とは別のところにある知識の分野が生まれてきて、聖職者が支配していた知の秩序とは違う秩序の中で人々が知識を獲得するようになった。これは余談ですが、時代が下がるにつれて、こうして生まれた「リテラシー」のレベルはだんだん下がってきて、読み書きさえできればリテラシーがある、といわれるようになっていきました。

それはともかく、そのときのリテラシーとは、基本的に情報処理だったわけです。ところが、いま台頭している新しいリテラシーは、モノ作りというか、コンピュータとモノをくっつける領域で起こっている。ちょうどルネッサンスの時代に多くの人々が読み書きを覚え、物を書くようになったのと似ている。今度はコンピュータと物理的な世界が複合した空間の中で、人びとが新しいモノの創造を始めるようになる、ということにガーシェンフェルトは気がついたわけです。ただしそれが普及するためには、一方で、1台何百万ドルではなくて、何百ドル、何十ドルで買える安価でしかも容易に使える機械が必要になります。他方で、それを使うのは誰かということになる。そこがおもしろいのですが、彼の家には6歳の双子がいて、「彼らが一番好きなことは、おもちゃ屋の代わりにMITの私の研究室に来て、その機械をいじり回して自分の思ったものを作ることだ」そうです。「他人が考えて作ったおもちゃではおもしろくない。おもちゃとは自分で作るものだ」と、6歳の子どもが考え行動するようになってきているというのです。となると、これ

はギークの行き着くところかもしれません。つまり、それはモブのすることではないかもしれない。モブの世界で起こるのはまた別の次元の進化かもしれない。つまり、テクノクラートはテクノクラートで、ギークはギークでさらに進化している可能性がある。

石橋 前々回のインタビュー(9月号)でうかがった、マイケル・ルイスが書いた『ネクスト』と関係の深い話ですね。実は、私には田舎に2歳半の甥がいるのですが、この前会ったとき、「インターネットしたい」と言うのです。どうやればウェブを見られるかということだけは知っていて、彼はまだ文字が読めないので、自分でマウスを使ってアイコンをダブルクリックして開くわけです。文字よりも先に直感的にコンピュータを使い始めているわけで、彼が大人になったときにはこういうツールを当然使いこなしているだろうと思いました。実は僕が2年前に大学の非常勤講師をしていたとき、学部1年生のコンピュータ入門の授業で、最初に教えたのはダブルクリックでした。大学で教えていることを、いまや田舎の2歳の子どもが体得しているわけです。それをリテラシーと呼ぶのかどうかはよくわかりませんが、少なくともスマートモブのメンバーになるための基本的な教育は自然に行われているのかなということを感じました。

公文 まさにリテラシーの中身が変わって、コンピュータを操作することになり、それからコンピュータに付属した工作機械を使っていろいろなモノ作り活動をしたり、生活上の体験をしたりする。そういう能力が、いわばニューリテラシーです。あるいはスマートモブ自身もそこまでいくのかもしれない。だとしても、そこまでいくのは10年、20年先のことでしょう。でも、方向はどうもそちらに向かっている。僕は昔、コンピュータとは何かという問いに対して、「それは人間が観念的に作るシステムをバーチャルな空間で実現する装置」だと答えてみた。つまり現実社会を支配している物理法則とは関係なしに、好きな法則を考えてもいい。それに従

うシステムをコンピュータの中に実現させるのだと考えた。ただ、さきほどのガーシェンフェルトの議論を聞いていると、そろそろその定義を変えなければならない。つまりバーチャルな世界ではなくて、観念的なシステムを現実的、物理的な世界で実現する装置がこれからのコンピュータだということになる。ただ、そうなると物理法則を無視するわけにいかない。

■ スマートモブズは良いものか、悪いものか

石橋 そういう意味では、たとえばBBSやウェブページを作ってバーチャルなコミュニティを作っていた人たちが、たとえば2ちゃんねるの突発オフとか、フラッシュモブズという形で、現実の世界でもつながるようになってきている。そこで、公文先生の定義に一段、間にはさむとすれば、コンピュータ+ネットワークでコミュニケーションの道具だという定義ができますが、それが現実の世界に移ってきているという現象があるという気がします。

公文 すると、バーチャルからソーシャル、そしてフィジカルという感じですかね。そこが出発点になって、モブたちが何をするのかということになる。その場合、とりあえず二つ問題があります。一つはモブというと、暴動やリンチを起こす悪い連中だというイメージがあって、それに対してモブも多少いいことができるかもしれないという弁護論をする必要があるという考え方がある。実際はそうではなくて、個人をとって見ても犯罪者もいれば聖人君子のような人がいるように、人間の集まりをとって見てもいろいろな性質があって、評価の基準によっては、ひどく悪いものもあればいいものもある。さしあたり価値中立的に考えると、ともかくいろいろなことをするだろうと考えられる。とりあえずは、群がりを作って、あるローカルな規則に従った行動をとる。多分、ある種のゲームをする。その結果として、何か違うレベルの秩序が生まれてくる。その秩序が評価の仕方に

よってはずばらしいものであったり、邪悪であったりするかもしれない。永続性をもった秩序であるかもしれないし、すぐ壊れてしまう秩序であるかもしれない。それらが選択されていくのでしょう。二つめの問題は、じゃあ、どんな秩序が出来そうなのか、すでに何かの秩序が出来ているのかと考えた場合、それに答えられるような研究がまだほとんどないことです。ここで強調しなければいけないことは、それはレベルの違う現象だということです。つまり個が何をやっているかというだけに注目しても、その結果として創発してくる現象の中身はわからない。創発的現象に対するイメージのなかで、一方の極にあるのは、得体の知れないモブが出てきて集団で悪さをする、あるいはすごく良いことをするというものです。他方の極にあるのは、そんなことは泡沫的な付け足しに過ぎなくて、世の中は依然としてある種の政治エリート、知的エリート、経済的エリートが動かしている、これは今後も変わらないだろうという考え方です。その真ん中に、これまでのエリートがある意味で大衆化していったモブになるが、彼らは本質的にこれまでのエリートと同じぐらい、個としても優れているのだという議論がありうる。

石橋 伊藤穰一さんがやっている Emergent Democracy (創発民主制) は、最後のものにあたるわけですね。

公文 情報化が進んでいくと、エリート的社會がや残り残るといふ見方と、エリート的性質が大衆の中に広がっていくという見方と、そうではない別の性質を大衆がもつようになって、そこから別の何かが発発してくるという見方があるということかな。

石橋 なるほど。

公文 個がエンパワーすることがいいことであり、エンパワーされた個が増えていくのがいいことである。こ

れが近代の理念だったでしょう。そうでなくなるとすれば、それは近代ではなくなる、ポストモダンであるという話になるのかもしれない。

石橋 そうすると、第二か第三の変化が起これば、その動きを中核としてポストモダンに入っていく。

公文 とも言える。しかし、そもそも、その理念自体を疑うこともできる。それが本当に近代の理念だったのかを、もう一回考え直してみる必要があるかもしれない。いまの二番目の立場、つまりエリートと言いたいような高い能力をもった個がどんどん増えていって、いずれはみんながそうなるというのは幻想にすぎないかもしれない。そうだとすれば、それを近代の理想だと考えることは非現実的です。できないことを望んでもしょうがないですから。すると最初の理念そのものの是非を見直してみなければならぬ。そのときに、見直したことは近代を捨てたことだと見るか、いや近代が成熟してもっと実現可能な理念を考えるようになったのだと見るか。もちろんその場合でも、個が良くなるという可能性を全否定するわけではありません。

石橋 すると、伊藤穰一さんが言っているような立場というのは、ポストモダンというよりは……

公文 ウルトラモダンかな。

石橋 全員が確立した個になるという、モダンの目標を達成しようとするものである。すると、スマートモブズは、そういうことをあきらめたというか、前々回のインタビューでおっしゃっていたような、全く違う価値観に立脚して社會ができていくという立場に立ったものですか。

公文 いや、近代の価値観を全く否定するわけではない。むしろ、スマートモブズになるのは、近代が墮落し

てだめになっていくと嘆く人に対しては、そうではないということでもある。別の視点からすると、個としても良くなっているところがあるわけですから。だから、広い意味でのエンパワーメントは続いているし、創発されるレベルの秩序でいうと、近代初期の軍事社会や産業社会に対する情報社会という、いわば近代の第三の形態が創発されてくるに違いないという意味で、僕は「ラストモダン」と呼ぶわけです。ただし、スマートモブズ自体は、ラストモダンの時代の人びとのあり方の最終形態ではないかもしれない。いまはまだ、ラストモダンの出現局面にいるにすぎないわけですから。

石橋　なるほど。今日は、スマートモブズとは何かをご説明いただき、いくつかの角度からの見方をうかがいました。集団として創発的知性、スマートさをもつものであり、それ自体は良いものでも悪いものでもないということでした。最後にお話しいただいた、近代とスマートモブズの関係については、いろいろ面白い見方があり得るが、本当の評価は現時点ではわからない、ということですね。興味深いお話を、どうもありがとうございました。

(2003年8月26日GLOCOMにて収録)